



青01木 ハンセン病に罹った人びとは、どのように知られてきたのか、どのように知らせようとみせられてきたのか。

こうした問いをたてたときに、まず、彼ら彼女たちの名をどのようにあらわすのかが問われることとなる。多くのハンセン病発症者たちはそれぞれが暮らす療養所に入ると、その外の郷里などに生きる家族や親族への配慮として、「園名」などといわれる仮の名を名乗ったりそれが与えられたりしてきた。歿後にも、生まれて最初に親などがつけた名を明かせなかった人びとも多い。療養所に生き、多くのばあいにそこで死んだ彼ら彼女たちをどう呼ぶかが1つの検討事項となる。もともと、「病友」といいあらわされる、療養所でも生きるものたちのあいだでも、いわゆる本名をたがいに知らないことがあるという。

ついで、名を奪われたり変えざるを得なかったりしたものたちを、その生と死において

¹⁾ 本稿は、2014年度後期滋賀大学内地研究員制度、2014年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究、福武財団第9回瀬戸内海文化研究・活動助成、日本学術振興会2014年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号26370788)による研究成果のひとつである。

どのようにあらわすかが問われる。療養所の内であろうと外であろうと、ほとんどのひとはなにかを成し遂げられたり、とくだんなにもしなかつたりしながら生き、そして死んでゆく。たとえば、わたしの母は^{はた}傍からみればその墓碑銘になにも記すべき事項がない人生を生きたとだろうが、その死はちいさな新聞記事となって報じられた。おそらく多くの療養所在園者たちも、第三者からすれば特記すべき事項をつくりださないままに亡くなったとみなされることとおもう。療養所に生き、そこで死んだ多くの人びとが、療養所のなかにある納骨堂におさめられた、いわゆる本名だったり仮名だったりを記された骨壺にただ眠っている。

ハンセン病をめぐる療養所に生き死んだ人びとをこのようにとらえてみると、つい、無名の民、無告の民といたくなる部外者がいることだろうとおもう。だが、はっきりと記しておく、彼ら彼女たちに名はあった。療養所の外にいるわたしたちが、それを知らないかその扱いを定めあぐねているにすぎないのだ。また、彼ら彼女たちがうけた苦しみや困難をみずから告げることもうたえることもできなかったというとき、それは、療養所内にいないわたしたちが、それを聞こうとしなかったからにすぎない。ある人びとを無名だ無告だというとき、それはそう呼ばれるひとたちのようすを形容しているのではなく、研究者であれジャーナリストであれ、ついそう呼んでしまうものの態度をあらわしていると考えなくてはならない用語法なのとおもう。

本稿は、青木^{けいさい}恵哉と名乗ったひとりの療養者のその生がどのようにあらわされたのかをまず確認し、それを点検する作業のひとつとなる²⁾。

青木も、この恵哉という名はいわゆる本名ではなかった。

²⁾ 青木については、阿部安成「青木恵哉の信仰—移動する療養者」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.193、2013年6月)、同『島で—ハンセン病療養所の百年』(サンライズ出版、2015年、第V章)、阿部、石居人也「わたり、わたす、書く、つなぐ—青木恵哉という時空」(阿部、石居監修、解説『選ばれた島』リプリント・ハンセン病療養所シリーズ1、近現代資料刊行会、2015年4月刊行予定)がすでにあり、それらと本稿とで重複するところがある。また本稿と組みとなる稿に、阿部安成「復刊事情—ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.223、2015年3月)がある。

青02木 現在、ハンセン病をめぐる国立で単立の資料館としては唯一となる³⁾、国立ハンセン病資料館（東京都東村山市）の展示をみよう。

同館2階の展示室1では、「歴史展示」と題された常設展示の1つを、「日本の政策を中心としたハンセン病をめぐる歴史」にかかわった人物の肖像写真と説明をつけた16枚のパネルで構成している。パネルの1枚は「修道女」の集団で、固有の名をもった人物がそれ以外のパネル15枚に配されている。8名が女で7名が男となる彼ら彼女たちは、キリスト教のミッションにより熊本に療養所を開設したハンナ・リデルに、国立療養所に勤務した医師である光田健輔や小川正子で、ただひとり青木恵哉だけがハンセン病発症者だった⁴⁾。パネルに掲示された人びとは、ハンセン病をめぐって、それに罹ったものとそうでないものと大きく分けられ、そのうちの前者はただひとりしかとりあげられなかったのである。

さきに引用した展示主題というべき「日本の政策を中心としたハンセン病をめぐる歴史」の文言は、その「中心とした」の語が「日本の」にかかるのか、それよりも「政策を」と結びつくのか、それがよくわからない、曖昧な表現ではある。それはともかく、どちらにしても、歴史をたどれば政策によってハンセン病患者の隔離が実施されたにもかかわらず、療養所に隔離された当人たちは（そして、隔離されなかった人びとはなおのこと）、この一劃の展示ではほとんどとりあげられないということとなる。たったひとり、青木だけがこの展示に居場所を与えられたのである。なぜか。

展示の解説文によると、彼の生地は徳島で、発症後に大島療養所に入り、そこで受洗、その後、四国伝道を経て熊本の回春病院に入り、しばらくののちに渡った沖縄の「本島全域で患者への伝道」をおこない、そこで療養所の「開園を導いた」その功績が認められるがゆえに、ひとり療養者としてとりあげられたというのだった。「伝道」のひと、信仰の「指

³⁾ ただし近年はハンセン病をめぐる国立療養所内にそこにかかわる史資料と展示を閲覧できる施設ができつつある（たとえば、長島愛生園歴史館 2003年開館、菊池恵楓園社会交流館（歴史資料館）2007年開館、沖縄愛楽園社会交流会館 2015年3月全面開館予定）。

⁴⁾ 本文にあげた4名以外は「看護婦」井深八重、「医師」服部けさ、「看護婦」三上ちよ、「医師」小笠原登、「医師」村田正太、「病院を開院」綱脇龍妙、「救護施設を開設」したコンウォール・リー、「施療所を開設」したジャン・マリー・コール、「病院に勤め」たエダ・ハンナ・ライト、「病院を設立」したジャルマン・テストウイド、「園を発足」したケート・ヤングマン。

導」者という青木像が提示されている。それはとりもなおさず、青木についてのひとつの評価にほかならない。青木が開園に導いたというそれが、1938年に厚生省移管のうえ設置された、臨時国立癩療養所国頭愛楽園である。現在の国立療養所沖縄愛楽園（以下国立療養所は、沖縄愛楽園、と略記する）の起源をたどったとき、それが「患者立」だったといわれるゆえんである⁵⁾。展示解説は文字数が少なく詳細を示してはいないが、この常設展は、療養所の基礎を造った療養者として希有であり特異であるから青木が展示されたのだと観覧されるだろう⁶⁾。

青 03 木 熊本県熊本市中央区黒髪にある社会福祉法人リデルライトホームは、1895年にハンナ・リデルが開設した回春病院の跡地にある。かつて同院にあった「ハンセン病菌研究所」は、のちにリデルの姪エダ・ハンナ・ライトがその2階に住んだときもある家で、いまはリデル、ライト両女史記念館と名称を変えた、関係史資料の展示をおこなう場所として活用されている（同ホームのウェブサイトより。2015年3月19日閲覧）。

青木が大島療養所のつぎに入った施設が回春病院だった。リデル、ライト両女史記念館では、1階に青木が差し出した書簡と、彼の著書という『選ばれた島』の英訳書 Mission to Okinawa が展示されている。展示にとりあげるべき、病院ゆかりの人物というわけだ。その2階には「回春病院の群像」と題された展示があり、人物の肖像写真と説明文が印刷された30枚のパネルで構成されている。そこにみえる人物は、支援者、医師、看護婦、牧師、国務大臣就任者、実業家などで、ただし、小笠原登や光田健輔などかならずしも回春病院に直接にはかかわらなかったものもふくまれている⁷⁾。これら30名のなかに3名のハンセン病発症者がいた。それが、青木恵哉、玉木愛子、津田治子である。

⁵⁾ ハンセン病問題ネットワーク沖縄編『入門沖縄のハンセン病問題—つくられた壁を越えて』(なんよう文庫、2009年)を参照。

⁶⁾ この展示ではほかに「沖縄愛楽園創立の経緯について、差別と迫害の中での療養所の創設の中心人物であった青木が書き遺した」『『選ばれた島』初版本』とその「青木恵哉直筆原稿 [複製]」がある。この「直筆原稿 [複製]」についてはべつに論じる予定。

⁷⁾ パネル展示された人物は本文にあげたもの以外に、清浦奎吾、安達謙蔵、大隈重信、渋谷栄一、宮崎松記、内田守、杉村春三、豊福浪雄、秋山= (示へんに皇) 範、春山田鶴子、米原馨児、荒砥琢哉、乙部勘治、福田令寿、後藤仁八、飛松甚吾、内田三千太郎、田宮貞亮、三井たみ、三宅俊輔、神宮良一、池尻慎一、エドワード・クロッパー、本田増次郎、田尻寅雄。

青木についての説明文は、出身地、生年、本名を記したのちはその年齢順に動向があげられ、発症、療養所入所、受洗、転院、沖縄伝道派遣を伝え、「迫害と焼き討ちに逆らわず、屈せず、粘る姿はカナン（聖書に示された神からの約束の地）を目指す民を思わせる」とその活動をキリスト教の教えにそって評し、そして「遂に沖縄愛楽園の創設」を実現したこと、「後に教会の牧師補」となったこと、「玉木への純愛も名高い」ことを教え、その歿年と享年を示して閉じられている。

パネルにみえる玉木と津田は、前者が「俳人としても有名」、後者が「歌集を出す」と、その作品が秀でていると評価し得るためにとりあげられたとうかがえるのに対し、青木のばあいは、やはり療養所の創設者として特出しているということなのだろう。

現時点で青木の展示は、東京と熊本でみられるこれら2点にとどまるとおもわれる。どちらも展示観覧者には、療養所を造った療養者だと青木を教えているのだった。

青04木 ふたつの展示がみせた、青木恵哉がかかわった場所を県においてあげると、生地の徳島、最初に入った療養所があった香川、つぎの療養所の熊本、療養所を造った沖縄、となる。

それぞれの場所で青木がどのように示されているのか、その一端を辞典や史誌の記述にみるとしよう（ただしここでは該当する文献を網羅したわけではない。ひとまずのとっかかりとする）。

まず、生地の徳島。『徳島県百科事典』（編集徳島新聞社調査事務局、発行所徳島新聞社、1981年）は、北條民雄（藤井喬執筆）をとりあげている。その著述である「いのちの初夜」（初出1936年）で知られるハンセン病発症者もまた徳島出身だった。だがここには同じ徳島生まれである青木の項はなかった。『別冊 徳島県歴史人物鑑』（発行所徳島新聞社、1994年）も同様で、北條（山下博之執筆）はあるが青木はない。

北條のとりあげられ方をみよう。上記2著での評価点は、「川端康成に指導を受け文学に生命を投入した。〔中略——引用者による。以下同〕彼が発表した『いのちの初夜』は新文学を代表するものとして、またわが国初めての癩文学と呼べる作品で文学界賞をうけた」（前者）、「川端康成の指導、支援をうけて『いのちの初夜』発表。文学界賞を受け、非常

に高い評価を得た」(後者)となるだろう。事典の誌面ゆえの客観性の担保という要請があるのかもしれないが、ここには厳密に言えば、執筆者自身による評価は薄い。そうではなく、過去において、川端という日本人のおおよそが知るノーベル文学賞受賞作家(その作品がよく読まれたかどうかはべつ)の指導をうけ、かつ当時の「文学界賞」をうけた人物だからここにその業績を顕彰しようという態度がみえるといわなければならない。なお、前者は北條の「本名」、ただし姓のみを明示した点に留意しておこう。

2014年は「徳島県阿南市出身の作家、北條民雄が生まれて100年に当たると、徳島県立文学書道館は「文学特別展／北條民雄—いのちを見つめた作家」(2014年8月7日～9月23日)を開催する「ごあいさつ」の冒頭に示した⁸⁾。この特別展にかかわって、北條の本名が、「出身地の徳島県阿南市の文化協会が8月1日に発行した本の中で初めて公表された」と報じられ、あわせて、特別展でも北條と川端康成とのあいだでかわされた「書簡の北條の本名部分も初めて隠さずに展示された」と紹介された。徳島県内の展示で「北條の本名部分」が明示されたことはこれまでになかったかもしれないが、すでにべつに書いたとおり、北條と川端のあいだをゆきかかった書簡は、なんら覆い隠されずに閲覧できたのだった⁹⁾。またさきにみたとおり、遅くとも1981年には徳島新聞社の刊行物によって、北條の本名が姓のみとはいえ公表されていたのだった。「初めて」の語がくりかえされたこれらの報道は¹⁰⁾、注意して読まなければならない。

この生誕百年のようすをみれば、徳島は継続して北條をとりあげ、彼を忘れようとはしない姿勢をみせているといえる。ただし、ハンセン病と徳島をつなぐ人物は、当然のこと、

⁸⁾ 展示図録の『文学特別展／北條民雄—いのちを見つめた作家』(徳島県立文学書道館計盛達也編、発行所記載なし、2014年8月)による。この図録については田中キャサリンより教示を得た。

⁹⁾ 阿部安成「療養所の歴史を縁どる—過去との乱取り」(35)、『青松』通巻第681号、2015年4月発行予定)を参照。

¹⁰⁾ このときの報道については、前掲阿部「療養所の歴史を縁どる」(35)を参照。そこでとりあげた記事以外にも「徳島」ハンセン病作家・北條民雄の展覧会始まる」(『朝日新聞』2014年8月8日、署名なし)、「ハンセン病作家の本名を公表 遺族「存在取り戻すよう」」(同前同年同月9日、署名、渡辺元史、編集委員・高木智子)、「(本の虫)ハンセン病 置き去り問う」(同前同年10月10日、署名、風媒社編集長・劉永昇)がある(すべて朝日新聞DIGITALによる)。なおさきにあげた同特別展展示図録には本名云々の記載はまったくない。

北條ひとりでも、青木をくわえたふたりでもないわけだが、これらの事典は北條にしか目が向いていないこととなる。

青05木 つぎに香川。そこには療養所があったのだから、青木ひとりではまったく足りず、香川にゆかりのある療養者は歴大な数にのぼる。そうしたところで、どのような記述となったのか。

『香川県大百科事典』（編集四国新聞社出版委員会、発行所四国新聞社、1984年）には、「大島」（三野昌夫執筆）、「大島霊交会」（西脇勉執筆）¹¹⁾、「国立療養所大島青松園」（岡田誠太郎執筆）、「宣教師」（西脇勉執筆）の項があり、地域のハンセン病をめぐる情報が掲載されていた。

それぞれの記述を順にみよう。まず「大島」、その位置、所在地、周囲のようす、面積、地理、島名の起源、由緒が示されたのちに療養所設置が記され、「国立療養所大島青松園として現在に至っている。世帯数七四戸、人口六一九人」という。さて、この人口とはだれを指しているのか、またここにいう世帯を形成しているひとはだれなのか、戸とはなにをかぞえたのか。誌面わずか13行ほどの短い文章だからか、大島の過去が柿本人麻呂や源平合戦にまでさかのぼってはいても、療養所設置以前の大島にだれが住んでいてなにをしていのかがよくわからない記述となっている。療養所ができてからも、大島にはそれとは区別される空間があったはずなのだが、それにはまったくふれもしていない¹²⁾。ならば、人口619人、世帯数74戸とは療養者を指すはずなのだが、人数はともかく、世帯数はどうかぞえ方をしたのか不明瞭である。居住区に74棟の住まいがあったのか、74の家族がいたのか？。

「大島霊交会」の項では、「プロテスタントのキリスト教信者によって結成されている」

11) 同会の名称は時期によって異なり、また、当事者もその名称の正確さには頓着していないようにみえる。現在は「キリスト教霊交会」と示されることが多い（本稿では、霊交会、と略記する）。

12) 大島の歴史の記し方については、阿部安成「歴史の島—国立療養所大島青松園の記述をめぐる歴史の領分」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.199、2013年8月）、同「故郷の島—国立療養所大島青松園の記述をめぐる歴史の領分(2)」（同前 No.201、2013年9月）を参照。

「一九一四年（大正3）同療養所の患者に対し、熱心に伝道を続けていたS・M・エリクソンや高松東教会の宮内岩太郎、信徒の患者三宅官之治によって創立」「昭和初期『靈魂は翔く』の詩集を出した長田穂波」の記述が不正確である。霊交会はかならずしもプロテスタントではない、霊交会結成時の療養所名は大島療養所、会創立にエリクソンや宮内岩太郎はかかわっていないといったほうがよい、長田の詩集の書名は「靈魂は羽ばたく」としてはならない。

ただ、ここには「後に伝道者となった青木恵哉らがいる」との記述が目をはく。もっとも、「後に」とはなにののちなのかがわからないのだが。香川を離れた療養者についても記載しようという姿勢がみえる。

青 06 木 「国立療養所大島青松園」の項にも、不正確、明らかな誤りの記述がみえる。それとはべつに1か所の記述をとりあげると、「入園者の約九〇％は既に菌陰性となっているが、さまざまな理由で社会復帰できないで園内で余生を送っている」、にみえる用語に深い違和を感じた。この項が掲載された事典の発行が1984年だから、いまから30年ほど以前のこととなる。2015年1月時点で82.3歳だという同園在園者の平均年齢が¹³⁾、1984年のころは何歳くらいだったのだろうか。平均年齢のうち、いつからが「余生」となるのか。なお、念のため、「余生」とは、「残りの人生。老後に残された人生。余命」をいう（『広辞苑』第6版）。ある人の人生をめぐって、だれがその残余を判断するのだろうか。

この項には「大島港」とのキャプションがついた写真が掲載されている。いまはない大島会館がみえ、栈橋に着岸している官有船「まつかぜ」も現在就航しているそれではない。記録として重要な写真ではあるが、いま「大島港」というひとはいない。「栈橋」である。かつては「大島港」といったのだろうか。

「宣教師」の項では、香川県域での「キリスト教の布教に務める外国人の司祭や教師」の活動がたどられ、さきにもみえたエリクソンについては、その「夫妻の本県での働き」が「単に宣教事業だけにとどまらず、英語教育を通じて高松高等商業学校、高松中学校、

¹³⁾ 「大島青松園入所者数・年齢別数等概況／平成27年1月1日現在」（『青松』通巻第680号、2015年2月、収載）。

高松高等女学校の生徒にも影響を与えた」とその幅広さがたどられている。ただし、この項のどこにも大島、霊交会の語はみえない。

上記のうち2つの項目を執筆した西脇には、「エリクソン宣教師と大島療養所一わが国救癩史の一齣にのこしたる或る宣教師の軌跡」(『四国学院大学論集』第42号、1978年12月)という論稿がある。執筆者に西脇がいたために、こうした項目が収載されたのか(こうした項目を収載するために西脇に執筆を依頼した編集方針があったのかもしれない)。療養所内の仏教団体などキリスト教以外の宗教がとりあげられていない特異な編集といえる。

青 07 木 『香川県人物・人名事典』(編集四国新聞社出版委員会、発行所四国新聞社、1985年)は、大島青松園にかかわる人物として「庵治町名誉町民」となった第3代園長の野島泰治をとりあげた(瑞木淡執筆)。医学者としての業績に「世界的な評価を得た」「発見」があげられる一方で、「同園〔大島青松園〕を指す」の運営にも尽力、設備強化を図るとともに文芸・宗教活動を促進、患者の精神的支えとなった」との評価が記されている。療養所の運営に尽力するなどといったことは園長として当然にすぎて特筆することではないが、「文芸・宗教活動を促進」したとの評価はおおむね妥当であるも(園長ひとりが「促進」したわけではなかろうから)、それが「患者の精神的支え」になったかどうか、わたしは判断しない。

同書刊行の1985年時点で大島の療養所である第四区療養所から大島青松園にいたる歴代所長園長は6名となる(2015年3月時点までで10名)。彼らのなかで(大島の療養所ではいまにいたるまで女性園長はいない)、特異な園長だったのかもしれない。

なお、同辞典で野島泰治のすぐしたには、野町良夫の名があがっている(吉尾匡三執筆)。「牧師・平和運動家。高知県安芸市に生まれ」た人物で、「沖縄などで牧師を務め」、ついで、一九五二年(昭和27)日本キリスト教団高松教会牧師。一九六〇年(昭和35)屋島教会を創立」という事蹟があるから「香川県」のひとをめぐる辞典に掲載されたのだろうが、彼は沖縄で青木恵哉とともに活動したり、霊交会の礼拝で牧師を務めたりもしていた霊交会ゆかりの人物である。この項の執筆者は、それらを知らなかったか、それらを記す必要はないと判断したのだろう。

ついで、『香川県史 別編Ⅰ 索引・総目次』（編集発行香川県、1990年）をみると、そのどこにもハンセン病関係の記事はなかった。「事項」という通史構成になっているページがあり、編集方針を「事項は、県民生活と関連が深いものを重点に採録した」というそのページの近代Ⅰ・近代Ⅱ、現代のどこにも、ハンセン病という事項はなかった。隔離施設であるから「県民生活と関連が深」くはないから採録していないということなのか。この欠落は、療養所がある県の姿勢として特筆に値するとおもう。

青08木 ここで、西脇の稿をみておこう。冒頭で「香川県が生んだ文豪、菊池寛」の作品「父帰る」に宣教師エリクソンが登場することをとりあげ¹⁴⁾、「エリクソンの名がわが国文芸史上、不朽の名作といわれる「父帰る」の中に出てくることは、キリスト教と日本文学、そして讃岐の国、高松とを連結させる一本の飾り紐を思わせる」とよろこび、末尾を「日本救癩史の側面から見れば、彼〔エリクソン〕はほんの一齣に登場してくる人物にすぎないかもしれない。然しその軌跡に、光り輝く永遠なものを見出すべくこの小文をしたゝめた次第である」と結んだのだから、西脇の稿執筆の趣旨は、高松という地域における、「救癩」という事業をめぐる、エリクソンの顕彰にあるとうかがえる。べつにいえば、これはエリクソン顕彰のために執筆した文章となるのである。

エリクソンが伝道をおこなった香川県の大島にある療養所で結成された信徒団体をめぐって、「本会〔西脇は「霊交会」とする〕の創立についてエリクソンが具体的にどのようにかゝっていたか、その詳細については知る由もないが、彼から洗礼を受けた初期の信徒達の間から自発的に発想され、彼らの厚い祈りの中に出発したものであろう」との推察を記す。また、「霊交会の信徒一人一人が如何に精神的渴望の中にあつたかを想う時、エリクソンの指導援助が彼らの生きがいを増し加えるのに大いなる力となったことであろう」「初期の頃は何といてもその指導についてエリクソンに負うところ多大であつた」との推断、断定も記し、エリクソンの「指導」が強調されている。

西脇も記すように、また、大島のキリスト教霊交会教会堂にゆけばだれにでもわかると

¹⁴⁾ 厳密にいえば、わたしのみた版では「エレクソン」となっている（『日本文学全集 28 菊池寛／広津和郎集』筑摩書房、1970年）。

おり、教会堂の前庭には、エリクソン夫妻と創設信徒のひとり三宅官之治の石碑があり、教会堂図書室のなかには、やはりこの3名の肖像写真が掲げられているのだから、教霊交会にとっていまにいたるまで、エリクソン夫妻と三宅が大切な、忘れられない、敬慕のひとたちだったことは確かである。だが、西脇が稿の「五、エリクソンに導かれた人々」の章で「霊交会員となった初期の信徒たちは当然エリクソンの指導にあずかった人々である」と断じ、他方で、創設信徒の三宅について「最も早く入所以前から信徒となっていた」と記したとおり、三宅はエリクソンの洗礼をうけてはいなかった。「療養所にキリスト教を導入した功労者の一人でもあった」と三宅を評しながらも、もとより在園信徒と宣教師との協業で信仰の場が整えられていったはずながら、西脇の趣意はエリクソンの「指導」の顕彰なのである。

青09木 西脇は青木恵哉にもふれ、「エリクソンの感化影響により入信した一人である。

〔中略〕祈りの信仰生活に明け暮れた彼は後日、その使命は、沖縄伝道にありとし、同地の患者のためその生涯を献げたのである」と記すだけで、その「偉大なる生涯については他の機会に譲」られてしまい、大島でのキリスト教霊交会信徒の信仰をめぐっては、「エリクソンの直接の指導を受けた信徒たちはその偉大なる信仰の火を後輩に伝え、信仰の輪は更に広げられつゝ今日に至っている」と、やはりエリクソンの「指導」のもとに概括されてしまうのだった。

かんたんに、小さな祈りの群、などと形容されかねない療養所の信徒団体を、『香川県大百科事典』という場に引きだした西脇の仕事は重要だとおもう。ただそれが宣教師の伝道とのかかわりがきっかけで、その指導を賞讃するところに執筆と掲載の趣旨があるとしたら、信徒たちはただの客体にとどまってしまう。わたしはそれが悪いといっているのではない。そうした記述であることに西脇は自覚があったのかを問うているのである。

それにしても、西脇の稿には典拠不明な推断が多く、また、誤記が多すぎる。西暦と元号暦の併記では両者がくいちがっている箇所が4つはあったし、重要な登場人物となるはずの宮内岩太郎の名(誤:豊太郎)、稿で主役となった宣教師の妻の名 L.J.Erickson¹⁵⁾(誤:

¹⁵⁾ 大島に生きる人びとの詩を英訳したロイス・ジョンソン・エリクソンについては、阿部

Y.J.)、長田穂波の著作名『^{たま}霊魂は羽ばたく』(誤:翔ばたく)、参照した土谷勉の稿名「青松私語」(誤:私説)、療養所の名称多磨全生園(誤:多摩)などなどを誤り、また誤認もあまりに多すぎ、大学の紀要稿として痛痛しいかぎりである。「エリクソン」を知るにしても、「大島療養所」を理解しようとするときにも、極めて不適切な稿である。

唯一、「米国南長老教会の宣教師」という James A. Cogswell の著書 *Until the Day Dawn* にエリクソン夫妻についての記述があるという情報が¹⁶⁾、わたしには有益だった。

青 10 木 ここでは、青木が一時暮らした熊本とその末期の地となった沖縄の史誌をみよう。

『熊本県史』はその近代編第二(編集兼発行人熊本県知事寺本広作、発行所熊本県、1962年)の第12章「社会・厚生」第2節「厚生」に「三 「ハンゼン」氏病対策」と題した項をおいた(執筆は内田守)。そこではハンナ・リデルの回春病院と、「本県出身の北里柴三郎博士」の業績などが記され、また同書第13章「人物」第4節「文化」でリデルがとりあげられている。リデルの回春病院に生きた療養者については、青木をふくめてひとりも記載がない。

同書第12章では、彼女を「日本に於ける癩救療所の濫觴であつた」と讃え、同書第13章では、「救癩事業」の功労者としてとりあげられていた。

『沖縄県史』はその別巻を『沖縄近代史事典』(沖縄県教育委員会編、国書刊行会、1989年復刻、原著1977年)にあて、「愛楽園」「青木恵哉」「沖縄 MLT」の項目を載せている(執筆はいずれも大城立裕)。

「愛楽園」の項をみよう。そのおよそ前半で沖縄県における療養所建設の経緯が示され、1932年の嵐山における用地買収とその挫折を記したところで、「これよりさき、熊本回春病

安成「読めない詩—療養者長田穂波と訳詩者ロイス・エリクソン」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.202、2013年9月)を参照。

¹⁶⁾ 著者名と書名しか記されていない同書の追加すべき書誌情報を示すと、Board of World Missions, Presbyterian Church U.S., c1957.で、同書は国際日本文化研究センターと四国学院大学図書館にしかない(CiNii Books。2015年3月30日検索)。また国立国会図書館にはその訳書のジェームズ・A.カグスウェル/真山光弥ほか共訳『夜が明けるまで—南長老派ミッションの宣教の歴史』(新教出版社、1991年)があった。

院から癩患者へのキリスト教伝道のために派遣された青木恵哉は」と始まる文章で、彼の活動がたどられる。用地買収、土地占拠をめぐる陽動作戦、療養所建設了承の言質、用地をめぐる迫害と死守、療養者たちの生活確保、療養者の鹿児島への移送成功、そして青木の「私有地」が「政府」に「寄附され、これを療養所建設の敷地とした」とまとめられている。

青木の活動に好評をあたえたいところながら、「愛楽園」という項の記述ゆえに、それを抑えつつ療養所建設の経緯を説いたとようすがうかがえる。

青 11 木 つぎに「青木恵哉」の項。青木については、「徳島県に生まれ沖縄の救癩に貢献した」「沖縄へかかわったはじめは癩者へのキリスト教伝道行脚であった」「はじめ羽織袴で〔沖縄に〕渡ったが、期するところあって病者たちと同じ服装に身をやつし、村々をたずねて「大和クンチャー」とはやしたてられながら、くじけず伝道した」「青木の智謀と宗教的信念とで空前の病者組織に成功し〔中略〕青木の指揮する癩者の一揆にひとしい行動力と地元住民の偏見とのたたかいであったが、ついに屋我地島大堂原に三〇〇〇坪の土地を購入することに成功し、これが愛楽園の立地を確保することになった」「愛楽園設立後は、園内の伝道につくした」などと記されている。青木は、およそ半ページの紙幅に4回もみえる「伝道」の語であらわされ、かつ、「たたかい」の「指揮」者として顕彰されたのである。

ただし青木についての記述には、正確さに欠けるところ¹⁷⁾、出来事がきちんとした時系列に沿っていないところがある。また、沖縄の病者をめぐる記述——「病者は生家にも落ちつけず、受けいれる世もなく、獣のように村々を流浪しながら非衛生的で救いのない生活を余儀なくされていた」（傍点は引用者）——は（とりわけ傍点部は）、必要な、適切な表現なのだろうか。「余儀なくされていた」というのだから、そうさせていた行政や近隣住民への批判や非難が籠められた記述にもみえるが、ここには、当局や社会への指弾に貼りついた、病者を貶める感覚が透けてみえるとおもう。非道は糾弾する、青木が闘ったのだから、その青木を讃えよう、とうたえる記述は同時にまた、青木が伝道の対象とし、彼

17) 「大島青松園療養所」という名称の療養所はない。

の闘いによる成果を得られた病者を惨めな受け身のものとおいたのだった。

青木は『沖縄近代史事典』において、彼の名をつけた項目でまず簡潔に「徳島県に生まれ沖縄の救済に貢献した」と記録され、伝道とあわせてみずから「療養所建設」をすすめ、「病者組織に成功し」、「たたかい」を「指揮」する「行動力」のひとと評され、そうした彼によって「愛楽園の立地を確保することとなった」と沖縄本島での療養所建設の軌跡にその生がおかれたのだった。

徳島、香川、熊本での青木のようなすは、ほとんど記録されていない。

青 12 木 青木は、その生地においても（徳島）、のちの活動の始まりとなる受洗の地においても（香川）、またのちに評価される事蹟のきっかけを指示した導き手がいた地においても（熊本）、事典や史誌にとりあげるにたるに十分な人物とはみなされなかったのである（さきにみたとおり香川ではわずかな記述があったが）。青木はほかでもない沖縄においてこそその業績が記載される伝道者にして闘士だったとされたのであり、他方で、彼の療養それ自体はほとんど顧みられない稀有な病者となったのである。

そうしたとりあげられようを支持するかのよう、歴史研究者が史料と呼ぶ青木の痕跡も、その物量でいえば、未調査ではあるがおそらく徳島にはなく、大島には数葉の写真と寄稿のある逐次刊行物とおそらく彼が沖縄から送った機関誌があるていどで¹⁸⁾、沖縄愛楽園にもっとも多く残っているとおもわれる¹⁹⁾。青木が暮らした時間の長さをふまえば、そうした痕跡の残りぐあいは当然でもある。

ただ、すでにべつなところで書いたとおり（前掲阿部『島で』）、大島のキリスト教霊交会にはその「昇天者名簿」が残っていて、そこにはとても淡白にみえるといってよい記載があった。青木の痕跡がしっかりと、香川の、大島の、教会堂のなかにあった一方で、その名簿には空白の項が多く、どこかちぐはぐな印象をうけるのである。そうしたちぐはぐなぐあいがなにに拠るのか、わたしはまだ確かめられていない。

また、熊本のリデル、ライト両女史記念館では、表紙見返しに「回春（降臨）」「熊本降

18) 前掲阿部、石居「わたり、わたす、書き、つなぐ」を参照。

19) 書簡、写真、直筆原稿などがあり、しかも近年になってあらためて見つかったものもある。

臨教会」(2つは異筆)と手書きで記された名簿をみることができた(2015年2月17日)²⁰⁾。その「信徒按手」のところに「青木安次郎」の名があり、その日付が「大正十三年四月廿日」、「監督」の欄には「アーサーリー」の名があった。

これについては、青木の著作という『選ばれた島』(発行者 W.C.ヘフナー、1958年印刷)に記載があり(33ページ)、

翌大正十三年(一九二四年)四月二十日、山田司祭の推薦でアーサー・リー主教司式の下に信徒按手の聖奠にあずかったのであったが、信徒按手を受けてから教会委員になるべきところを、私は逆に教会委員になってから信徒按手を受けたのである。

——これは回春病院での青木の「異例」な扱いの証左として記されていたのだった。按手とは、ひとの頭に手をおくキリスト教の儀礼行為をいう。『選ばれた島』という書籍に、信徒按手の日付の記載があるのだからそれでよしとしてもよいのだろうが、それについてのより確かな記録が青木が生きた熊本に残っていたのだから、これは青木の歴史をたどるときに重要な証跡となるはずだ。

だが、わたしがみたかぎりでは、この大島と黒髪に残る青木の痕跡について書いたものは、ひとりもいなかった。

大島療養所では「偽名」(『選ばれた島』)は筆名をつかった青木も、回春病院では、あるいは熊本の教会では「安次郎」を名乗っていた。

青木の記録を整え、その人物を記録してゆく作業は、まだこれからなのかもしれない。

²⁰⁾ 史料閲覧にさいして同記念館館長より教示を得た。ここに感謝を記す。ありがとうございました。



【附記】べつに書いたとおり（前掲阿部、石居「わたり、わたす、書き、つなぐ」、青木と同郷でしかも話し方までそっくりだといわれた在園者が2015年3月下旬に亡くなった。享年99歳。まさに白寿だった。似ているという話し方とは、いわゆる^{おくにことば}方言なのだろう。わたしは、この在園者とほとんど話したことがない。ときおりの聖日礼拝でみかけるくらいで、2014年5月の創設信徒三宅官之治墓前礼拝で初めて、長いいっしょの時間を過ごした。そのときのために歩く練習をしていたと聞いた。昨年の骨折までは、よく歩いていたという。そのためか、お骨となった足がとてもしっかりしていたとのことだった。彼が詠んだ川柳にはくりかえし、「ワンカップ」の語がみえる。

